

## 2021年9月19日 説教「わたしは真理です」

ヨハネの福音書 14章 6～11節

トマスの質問に対する、主イエスの答えは続きます。

### 1. わたしを知っていたなら (6～7節)

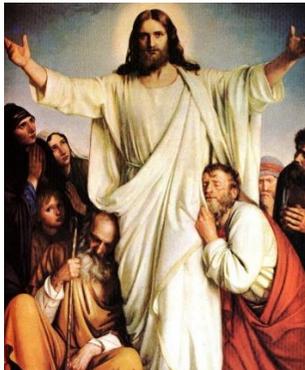
①真理である (6)「**イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』**」このお言葉は、トマスの質問に対して、イエスが答えられたものです。「わたしが道である」という点については、前回学びました。今朝は「わたしは真理である」といわれたポイントについて、ともに考えていきます。このことを、理解しやすくするために、以下にイエス・キリストが続いて述べられたことを見ていきたいと思ひます。

②父をも (7)「**あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。**」6節のお言葉は、ある面では衝撃的です。しかし、7節以下にも、異なった角度から重要な事が語られています。つまり、「あなたは、わたし(イエス)を知っていたなら、父をも知っていたはずです」とのお言葉は、6節と呼応するようにして、父なる神を知る道が示されています。トマスの質問に対する、もう一つの答えでもあります。それでは、イエス・キリストを知るとは、どういうことでしょうか。「知る」というのは、知識的な面もさることながら、イエス・キリストのご本質に触れることです。例えば、キリストが愛なる方ということ言葉を学ぶことは重要ですが、その内容を自らの存在全体で受け止めることができれば、イエス・キリストという方を、本当に知るあることに近づくでしょう。

③すでに父を (7)「**しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。**」いささかなりとも、弟子達はイエス・キリストを主として歩んできた者たちです。言い換えれば、彼らは主を知っている者たちです。そうであれば、彼らの意識として希薄であったとしても、彼らは父なる神を知っていることになるのだと言われるのです。さらに、イエスを知ることにより父なる神を見たのです。これは、肉体の目で見たとはいよりは、魂の目によって、父なる神を見たと言われたのです。

### 2. キリストを見るということ (8～9節)

①ピリポ (8)「**ピリポはイエスに言った。『主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。』**」ここに出て来るピリポは12弟子の一人。ガリラヤ湖沿いの町ベツサイダの人で、ペテロやアンデレと同じ町の出身でした。ピリポが主イエスに従った時に、ナタナエルをキリストに導きました(ヨハネ1章)。このピリポは「使徒の働き」6、8章に出てくるピリポとは別人です。ピリポも率直に「私たちに父なる神を見せてください。」と願います。率直ですが、「そうすれば満足



- します」と答えには、彼の自己満足を求める傾向が現れています。
- ②ともにも (9) 「イエスは彼に言われた。『ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。』」イエスはピリポに、ガリラヤでの出会いの時から、今に至るまでの3年余り、始終いっしょにいたのに、イエスが誰であるのかがわからなかったのですかと逆に問います。そういえば、エマオ途上で復活のイエスに会ったクレオパともう一人の弟子も、ずっと歩いていてイエスだと気づきませんでした。あなたは隣にイエス様がいたとして気づくと思いますか。
- ③キリストを見た者は (9) 「わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、「私たちに父を見せて下さい」というのですか。」イエスはピリポに「わたした者は、父を見たのです。」と言って、父なる神を見たがるピリポを軽くいさめて、イエスを見ることを通して、父を見ることができるとを教えられたのです。「いまだかつて神を見た者はいない」(1:18)とあります。それは、出エジプト記 33:20に、「人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」とあるように、人は聖なる神を見ることを許されていないからです。ただ、「父のふところにおられるひとり子の神が、神を解き明かされたのである」(1:18)ということが大切なのです。

### 3. キリストを信じることは (10~11 節)

- ①キリストと父 (10) 「わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。」キリストは不思議なことを言われます。「わたし(キリスト)が父(なる神)のなかにあり」、「父(なる神)がわたし(キリスト)のなかにある」ということが、並べて伝えられているのです。これをユダヤ人たちが聞けば、怒り心頭だったことでしょう。つまり、キリストと父なる神とは一体であると言われていたのですから。もっといえば、ここでキリストはご自分が神であると宣言しておられるのです。そして、そのことを弟子達に「信じないのですか？」と尋ねているのです。
- ②ご自分のわざを (10) 「わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」そして、ユダヤ人から見れば冒とく的にすら思える、そのような言葉について、「わたしが自分から話しているのではありません」と言われているのです。それでは誰が話しているのでしょうか。キリストは、天の父なる神が御子であるキリストに促され、それをキリストは語っておられるというのです。それは、まさに父なる神のみわざであるというのです。
- ③信じなさい (11) 「わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。」す。「わたしが父におり、父がわたしにおられる」ということを信じ

なさいと、キリストはいいます。そうでなければ、父なる神がなさっているみわざを信じなさいというのです。また、キリストご自身がなされるみわざを信じなさいと言われます。キリストがなさってこられた奇跡やその働きには、人間の力を越えた大いなる御力がそこにあらわれていたからです。

### 《結論》

国会図書館に入ってすぐの壁に「真理はあなたがたを自由にする」という

言葉が掲げられています。もちろん、ここでは学問追及の目的は真理であっ

て、その真理は追究者を自由にするという意味でしょう。しかし、実を言うところ

の言葉は聖書から来ているのです。それもイエス・キリストの言葉だったのです。「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします」(ヨハネの福音書 8 章 32 節)とある通りです。イエス・キリストが言われる自由とは何でしょうか。それは私たちの魂の自由です。学問を追求する姿は美しいものですが、果てしないものであり、いったいどこに真理があるのかは生涯かかっても、見出せるものではないでしょう。万巻の書を読んだという人の晩年の感想を聞いても、それは明らかです。魂の自由は、全く異なるところから与えられるからです。それではそれはどこから得られるのでしょうか。

十字架につけられる直前にイエス・キリストはローマの地方総督であるポンテオ・ピラトから審問を受けます。そこで二人は問答をします。そこで、キリストは「わたしは真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」(18:37)と述べられます。すると、ピラトは問います。「真理とは何ですか」。この問いに対して、キリストは答えを述べておられません。沈黙されているのです。しかし、キリストはすでにそのことについて、はっきりと答えを述べておられたのです。「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」(14:6)と。ピラトはキリストが(天と地を支配する)「王です」と明言された時に、このことを知らされていたともいえます。

今朝の聖書箇所では、キリストはご自分が父なる神と一体であることを繰り返し述べておられます。そして、「わたしが父におり、父がわたしにおられることを信じなさい」と弟子達にすすめています。このことは何を語っているかと考えるに、私たち人間がいかに知力を尽くしたとしても、それが的外れであれば、真理には行きあたらないと

ということです。そして、この「的外れ」というのは「罪」の重要な意味であったのです。罪とはまた、神との断絶関係を意味します。断絶していれば、人間の努力によっては、それをうめることは到底できないのです。であればこそ、この御言葉が救いになるのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」。そうです。イエス・キリストがその断絶の橋となり、私たちをまことの神との関係回復を与えてくださるのです。

この関係の回復こそが救いであり、私たちに魂の自由をもたらすのです。それはまさに恵みです。関係の回復にあたっては、神との断絶関係における個人的な罪を認めていくことです。そして、それを告白していくことです。神を無視してきたものが、無限の神を認め、キリストの十字架による罪の贖いのみわざを受け入れ、キリストを信じしていくことです。真理にまします、イエス・キリストを心から信じ、魂の自由をいただいてまいりましょう。